P1-057

２歳以下のＲＳウィルス感染症罹患児における修正ＭＰＩスコアを用いた評価への看護師の経験年数による影響

黒岩 志紀[1,2)]、井手口 範男[3)]、青木 元邦[3)]、酒井 規夫[4)]、太田 國隆[5)]、城下 淳子[6)]

森ノ宮医療大学　保健医療学部　看護学科[1]、
森ノ宮医療大学　大学院　保健医療学研究科　医療科学専攻[2]、
森ノ宮医療大学　保健医療学部　理学療法学科[3]、
大阪大学大学院　医学系研究科　保健学専攻　生命育成看護科学講座　成育小児科学[4]、
一般財団法人　甲南会　甲南医療センター　小児科[5]、
一般財団法人　甲南会　甲南医療センター　看護部[6]

【目的】ＲＳウィルス感染症は２歳未満の乳幼児に多く認められる疾患である。乳幼児は、生後１歳までに半数以上が、２歳までにほぼ100％が初感染を受けるとされる。初感染はまず上気道炎を引き起こすが、そのうちの25から40％が下気道炎にいたり、その結果２から３％前後の乳幼児が重症化し入院加療を要するとされる。米国においては年間７から１２万人、日本においては２万人前後の入院例があると推定されている。ＲＳウィルス感染症においては不顕性感染、潜伏感染がないため、急性の呼吸器症状を呈しＲＳウィルスが迅速抗原検出キットにより検出された場合はＲＳウィルス感染症と診断し得るとされている。現在の治療は有効な抗ウィルス剤がなく、対症療法が中心となる。臨床において言語発達の未熟な乳幼児については看護師の観察が重要となるが、看護における重症度の判定基準は明確化されていない。
一方で、修正ＭＰＩスコアは気管支喘息の発作の重症度を評価するものであり、その有用性はすでに立証されている。このスコアの応用としてＲＳウィルス感染症に対する修正ＭＰＩスコアの検討では、入院期間とスコアが相関すると報告されている。
そこで、本研究ではＲＳウィルス感染症の入院患者に対しての修正ＭＰＩスコアを用いた評価成績が看護師の経験年数に影響を受けるかを検証した。
【方法】パートナーシップナーシングシステム（福井大学医学部附属病院看護部発祥の新しい看護提供体制である。２人の看護師がペアを組んで複数の患者を受け持ち、対等な立場でお互いの特性・能力を活かしながら補完・協力し合い、看護業務を行うため看護師の経験によって患者の観察・状況判断などに差がでないとされているシステム。患者の観察を２人の看護師が同時に行う。）を導入している小児病棟において、２歳以下のＲＳウィルス感染症の入院患児（除外基準あり）を対象に修正ＭＰＩスコアを用いた評価を行い、その成績について経験年数の高低による２群間比較を行なった。
【成績】同じ経験年数のパートナーの組み合わせを除いた、86例を分析した。Wilcoxonの符号付順位検定において0.207（$p < 0.01$）で経験年数の高低による２群間に有意な差があるとはいえないことが示された。
【結論】ＲＳウィルス感染症における修正ＭＰＩスコアを用いた評価は看護師の経験年数による影響を受けるとはいえないことがわかった。

P1-058

小児看護技術習得のための乳幼児バイタルサイン測定シミュレーター開発に関する基礎的研究

守口 絵里、山本 裕子、茎津 智子

京都光華女子大学　健康科学部　看護学科

【目的】小児看護学実習ではほとんどの学生がバイタルサイン測定を経験しており、本学では事前に測定の練習期間を設けているが、実習での実際の測定では子どもの反応に合わせて様々な工夫をしなければならず学生らはしばしば困惑している。そこで、より実習での状況に近い想定でバイタルサイン測定が練習できる乳幼児の測定シミュレーターの開発を目指すべく、そのための基礎的研究として小児看護学実習における学生のバイタルサイン測定状況や実習前の練習状況について調査した。
【方法】2017年９月～2020年３月に小児看護学実習を履修した学生284名を対象とし、実習前にはバイタルサイン測定の練習について、実習後には実習中の測定について、それぞれ質問紙調査を行った。実習に参加する学生に質問紙および本研究の趣旨や倫理的配慮についての説明文書を配布し、所定の回収ボックスにて回収した。得られたデータについては統計ソフトＳＰＳＳ　Ｖｅｒ．２６を用いて統計学的分析を行った。なお本研究は京都光華女子大学研究倫理委員会より承認を得て行った。
【結果】質問紙の回収結果は、実習前166部（回収率58.5％）、実習後170部（59.5％）であった。実習前には91.0％の学生が測定の練習をしており、練習回数は2.85回（ＳＤ1.66）であった。練習方法としては84.0％が新生児のバイタルサイン測定シミュレーターで、51.3％が実測できない乳児モデルで練習しており、実際の子どもで練習したのは4.0％であった。実習で受け持った患児の平均年齢は4.35歳（ＳＤ3.84）で、うち46.2％は０～２歳児であった。97.6％の学生が測定を経験しており、測定回数は2.95回（ＳＤ1.79）、測定項目は体温98.8％、血圧54.8％、心拍数74.1％、脈拍数62.0％、呼吸数94.0％、測定時の体位は仰臥位37.3％、座位76.5％、抱っこ33.1％であった。測定時の困難については、「子どもがじっとしていなかった」「子どもに泣かれた」「母親への協力の求め方がわからなかった」において年齢による有意差を認めた（$p < 0.01$）。
【考察】実習前にはほとんどの学生が新生児シミュレーターで測定の練習をしていたが、実習に即した効果的な学習となるためには多くの学生が実習で受け持つ乳幼児の反応や工夫を想定したシミュレーターでの練習が望まれるところである。

Presented by Medical*Online